

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	研究と実践のギャップ
別タイトル	The Gap between Research and Practice
作成者（著者）	西脇, 祐司
公開者	東邦大学医学会
発行日	2022.12.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 69(4). p.167 167.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	巻頭言
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2022 026
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD17053071

研究と実践のギャップ

西脇 祐司

東邦大学医学部社会医学講座衛生学分野

予防医学分野の疫学研究で最も多いデザインは、観察研究である。とくに要因 X とアウトカム Y との関連解析を行うタイプの研究が圧倒的に多い印象である。Y は、研究目的によって、疾患の発症だったり、死亡だったり、要介護状態の発生だったり様々だ。こうした研究により強い関連が示唆されると、介入研究のステージに移行する。関連が観察された要因を制御することにより、アウトカムの発生を事前に予防できないかどうかを確認するわけである。介入研究は、理想的な環境下での効果（教科書によっては効能ともいう）を調べる Efficacy 研究と、実際の現場での効果を調べる Effectiveness 研究に大別されるだろう。

こんな例を挙げて考えてみる。地域高齢者を対象に、介護予防体操教室が、将来の要介護状態を予防するかの研究である。研究に参加してくれる地域在住の高齢者 200 名を募り、介入群と対照群にランダムに振り分ける。介入群では、研究費で雇用する健康運動指導士が 1 回 1 時間の体操指導を週 2 回、6 か月実施する。対照群には、講師による介護予防に係る講演と冊子の配布のみを行う。介入後、1 年間の追跡期間中の要介護の発生状況を比較する。ご存じの通り、RCT といわれる研究デザインである。これにより、要介護のリスクが仮に 15% 削減されたとしよう。つまり、研究により Efficacy が確認できたことになる。まずはめでたしめでたしということで、研究者は論文にし、投稿する。当然、介護予防体操教室は、介護予防の有力なツールとして期待される。したがって、いろいろな自治体がこれを取り入れる。しかし、自治体は常にマンパワー不足なので、研究者がつきっきりで進捗管理をした先の RCT ほどは手をかけられず、自治体なりのアレンジを加えながら展開する。実施してみると、参加者は喜んでくれるのでそれはそれで良いのだが、介護予防の効果は思ったほどではない。そもそも途中から来なくなってしまう参加者も結

構いる。初年度は良かったのだが、続けてやっていると結局参加するのは、放っておいても元気な高齢者ばかりになってしまい、本当にリスクの高い人は呼び掛けても来てくれない、などという自治体もある。つまり、Effectiveness の方は、期待したほどでないという結果になってしまった。ちなみに、あくまでありがちな仮想例として取り上げただけで、介護予防体操教室を否定しているわけではない、念のため。

このように、予防医学分野（に限ったことではないのだろうが）において、研究と実践（実装）との間には大きなギャップが見られることがしばしばある。がん検診しかり、特定健診・特定保健指導しかりである。せっかく研究としてのエビデンスはあるのに、いまいち現場に普及しないという感じである。近年では、このような研究と実践のギャップを科学しようということで、Dissemination and Implementation Science（普及と実装科学、通称 D&I 科学）という学問が注目を集めている。D&I 科学研究会の HP によれば、D&I 科学とは様々な研究デザイン、方法論を用い、患者、保健医療従事者、組織、地域などのステークホルダーと協働しながら、エビデンスのある介入法を、効果的、効率的に日常の保健医療活動に取り入れる方法を開発、検証する学問領域とある。これからの発展に期待したい。

思えば、世の中全て理想と現実の間にはギャップがある。高い理想を掲げ、その実現の為に努力を続けることは、まことに高邁な精神といえる。翻って、自分はどうか。高い山を見上げてから歩き出すのは苦手である。現実の中で目の前の一歩一歩を進めていったら、いつのまにか少しだけ山を登っていた（理想に近づいていた）、という方が性に合っている。と言えはまだ聞こえは良いが、ようは目の前の課題解決に四苦八苦の人生というだけの話である。

DOI: 10.14994/tohoigaku.2022-026